

## たった十二円。されど十二円。

所沢市立東中学校

三年 小林 未来

小さい頃、コンビニで飲み物を買ったときのことだ。おつりと共にもらったレシートの最後に「消費税十二円」と書かれていたことがとても気になった。「こんな少しの金額が本当に社会の何かに役に立ち、使われているのだろうか。」と疑問に思ったことが、税金について深く考えたことの初めだったと思う。

それまでは「税金は、お金が物の値段より、多くかかってしまうもの。」というイメージしか持っていなかった。でも調べてみると、その「たった十二円」にも大きな意味があることが分かった。私達、小中学生が使用する教科書や公共・交通機関、そして災害が起きたときの復旧や支援など。私が元々、考えていたよりも、自分の身の周りの多くが、税金によって支えられていると知り、驚いた。特に、災害時、避難所の設置や救援物資の準備に税金が使われていることを知った時、「この十二円が、誰かの命を救っているかもしれない。」と思えてきた。

さらに、「自分はたしかにこの社会の中で生きているんだ。」という自覚ができた。今までは、社会の仕組みやお金の流れなんてどこか遠くのことのように感じていた。でも、税金をきっかけに、「自分の暮らしもこの社会とつながっている。」という

実感がわいた。普段当たり前に受けているサービスが、どれだけ多くの人の働きと税金によって支えられているかに気づくと、自分もその輪の一部なんだと思えた。

一方で、「税金が無駄に使われている。」とか、「ちゃんと使われていない。」というニュースを見かけるようになった。せっかく誰かのために払っているお金が、意味のないことに消えてしまったら悔しい。だからこそ、私たちは「どこに、どう使われているのか。」を知ろうとすることが大切だと思う。

今の私はまだ大人と比べて、払っている税金は少ない。でも、数年後には大人になる。正直に言うと、「自分のお金がとられる。」というイメージが消えず、いい気持ちはしない。けれど、自分の払ったお金が少しでも、困っている誰かの助けになっていたり、未来の教育や環境のために使われたりするなら、それは「取られる」ではなく「たくす」ことなのではないかと思えるようになった。

私は、自分の十二円が無駄にならない世の中であってほしい。そのためには、政治や税の使い道に文句を言うだけでなく、「私はこう思うから、こう使ってほしい。」と声をあげられる大人になりたい。税金は義務だけど、同時に一人ひとりの「声」でもあると思うから。

十二円は小さい。しかし、考え方ひとつで、そこに込められる意味は大きくなる。あの日のレシートの十二円は、私にとってただの消費税ではなかった。社会とつながる入口だったのだ。